
東方癒式猫

霧夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方癒式猫

【Nコード】

N2275BA

【作者名】

霧夜

【あらすじ】

ある日、なぜか白い猫又に転生してしまった主人公。彼は、東方の世界で何をして、誰と会い、何を思うのか？

東方の二次創作小説です。キャラ崩壊、オリキャラ介入などなど、二次創作要素満載です。苦手な方は、ブラウザバックをおすすめいたします。

プロローグ（前書き）

また、KSみたいな小説を書いてしまった。

プロローグ

「どこどこ？」

そんなことを呟く僕は、……えつと……名前なんだっけ？
まったく思い出せない。何でこの森の中にいる前の記憶がないんだ？……へ、なにこれ？新手の嫌がらせ？それとも、何かのテンプレか？……とりあえず落ち着こう。もちつこう。それよりも、
気になるのは……。

「とりあえず……。のど渴いたし、水を探すか。」

そんな事を言いながら水を探し始める僕。本当にのどが渴いた訳ではない。ただ単に落ち着きたかったのである。

見つけた。どうやら湖のようだ。周りは、草木に囲まれている場所だ。

「うん。水美味いけど……。何で猫になつてるんだ？」

さつきから、どうも視線が低いと思っただよね。どうやら白い猫のようだ。しかも……。

「尻尾が二本あるんですけど……。」

思い当たるのは、『猫又』

『猫又』

猫股とも書く。年を取った飼い猫が変化へんげした妖怪。

葬儀場や墓場から死体を盗み、その人間になり替わったりする。

黒猫の猫又が最強と言われる。

普通の猫の姿をしているが、扉の開け閉めが両方できる猫が猫又と言われる妖怪である。

「……まあ、僕は、白だから最強じゃない訳だ……。まあ、

人間だった時も平和主義を貫いてたからちよつどいいか。」
そんなこんなで僕の妖怪ライフは、始まりを告げたのであった。

プロローグ（後書き）

短いですね or z 誤字脱字などありましたらお気軽にお寄せください。

鬼さんですか、そうですか(前書き)

今回、結構時間。

鬼さんですか、そうですか

前回から二〇年という月日が過ぎた。・・・え？何でそんなに時が流れているかって？・・・ふっそれを気にしたらダメというものだ。

とりあえず、僕の能力？という物があることが判明した。その名も『人を和ませる程度の能力』・・・え？なにこれ・・・弱くね？まあ、平和的でいいか。そして、結構、妖力？という物の操り方も覚え始めた。

そんな事よりも、もっと驚くべきものを発見した。それは人間の住む村だ。どうやら僕は、タイムスリップ？もしたみたいで、豎穴住居である。うん。初めて見たとき僕も驚いた。

「まあ、人間に会いに行ってみるか・・・。」
そうやって僕は、四本足で人里へと走り出す。・・・ああ、いまさらだけどなんか身体能力が凄いいみたいで五十m三秒台で走れた。

「なにこれ？」
そう言うしかなかった。なぜなら、人里で暴れまわる一人の男性。年齢は・・・二十歳くらいだろうか・・・。周りの人間なんか、

「うわー。」
「に、逃げるー！！」

こんな声上げて逃げ回っている。僕も逃げようかな。ちょ、男の人こっち向いたけど・・・。

「お前は何者だ？」

ヤバイ。マジでヤヴァい。完全にこっちを獲物を見つけた目で見てくるんだもん。

「ニヤア〜。」

とりあえず、猫の振り・・・そうだ猫の振りだ。これこそ、逃げるための手段だ！！

「ごまかすな。妖怪。」

＼(＾0＾)／ オワタ

「あ、ばれた？」

「当たり前だ。鬼を見くびるなよ。」

ヤバイ睨みながら言ってくる。ハツキリ言ってる怖え〜。ああ、そうだよ、僕は、チキンだよ！チキンで悪いか！！

「・・・獣がしゃべったら変だと思ってるね。」

「獣？・・・まあ、いい。俺は、鬼の神鬼しんぎせんま戦真だ。お前も、名を名乗れ！」

「ごめん。名前無いんだ。種族で名乗ると『猫』まあ、『猫又』だがね。」

僕は、クツクツと笑って見せた。それが気に入らなかったのか戦真はムツとしたがすぐに、

「『猫』？『猫又』？そんな種族、聞いたこともないし見たこともないぞ。」

「・・・は？」

怪しくなつて周りを見渡してみると人間も首を傾げている。猫を見たことがない？そんな馬鹿な・・・まあ、いいか。

「それより、僕に何かようですか？」

「・・・とぼけるな。そんな妖力を持って俺の前に現れたということは分かっているだろう。」

「全然わかない。」

「・・・。」

ヤバイ。とぼけてみたら頭抱えられた。

「……。それだけの妖力を持つていたら、鬼である俺が戦いたくならない訳がないだろ？」

ニヤリと笑いながらこつちに尋ねてくる。

「つまり……。戦えと？」

「そのとうりだ。」

「ああ。空が青いな。」

「てっ、おい。とぼけるな!!！」

とぼけたら突っ込んでくれた。え、もしかしていい人!? ……妖怪か。

「……帰ってもいいですか?なんか、くる場所間違えたみたいなので。」

「逃がすだけでも? ……てっ、おい!!！」

とりあえず、にげてやったZE 三十六計逃げるにしかずつてな。

……森の中……

「待てやコラー!!！」

「待てと言われて待つやつがいるか!!！」

「じゃあ、逃げるな!!！」

「同じじゃねーか!!！」

そんなことを言いながら鬼から逃げるために僕は、絶賛逃走中である。あいつ速いし。僕に普通についてくる。てか、なぜこの状況で目の前に崖あるし!

「さあ、追い詰めたぞ。おとなしく戦え。『猫又』とやら。」

「分かったよ!! 戦えばいいんだろ!!！」

「その通りだ。」

「いくぞ!!！」

勢いよくごぶしが飛んでくる。僕は、紙一重でそのごぶしを避け

た。こぶしが地面に当たるとそこがクレーターのようになっていた。

「そんな威力ありかよ……。しかも、能力もちだな？」

「ほう、よく分かったな？その通り、俺の能力は『力を調整する程度の能力』だ。」

「チートだな。」

さて、どうしよう？

- 数刻後 -

やあ、まだ交戦中なんだ。でも、勝つ方法が浮かんだ。

「いつまでも避けてるんじゃ勝つことは・・・グフ。」

とりあえず、一蹴りしてやった。そして、妖力弾を放つ（もちろん手加減なしの）。

「そんな物……。く……。く……。」

命中した瞬間戦真は倒れ掛かった。その瞬間にぼくは、一番大きな妖力弾を頭上に作り出す。

「……。くつ、まだ終わら……。『いや、終わりだよ。』……

な!？」

気づいたところでもう遅い。僕は、すでに妖力弾を投げていた。

「えっ、ちょ!？」

命中した。

鬼さんですか、そうですか（後書き）

今回無理やり感が半端じゃない・・・。

ぶんぶんぶん。鬼が飛ぶ(前書き)

一日、三話投稿はきついですね。明日から学校・・・ウボア。

ぶんぶんぶん。鬼が飛ぶ

・・・とある洞窟内・・・

side 戦真

「ん・・・ここは？」

そんなことを言いながら目覚めた俺は、戦真だ。今は、見慣れない洞窟の中にいる。とりあえず言えるのは、先ほど戦った『猫又』とか言ったか？あいつが運んでくれたのだろう。それを結論付けるように近くの岩の上に寝ている。力が強いのになぜ、奴は人の形をしていないのだろうか？この俺は、妖怪の部類では強い部類に入る。まあ、種族というのもあるが・・・。それなのになぜ？

「ん、ん〜。」

奴が伸びをした。可愛いと思った俺は間違っているだろうか。

「お！起きたのか？」

「ああ。」

「よかったな。傷も癒えたみたいだし。」

そう言って笑いかけてくる。

「・・・なぜ？俺を殺さなかった？」

「え？ああ、理由がないからな。それに、殺すとかそういうの嫌いなんだよ。」

「・・・。なるほど。」

まったく不思議なやつだ。妖怪の筈なのに殺しを嫌うとは・・・。「そういえば？なぜ僕に戦いを挑んだ？鬼の本能とは別の理由があるんだろ？」

「・・・ああ。この山の丁度上くらいに鬼たち住んでるんだよ。だが、そこには鬼神がいない。そこを俺が力を示して鬼たちをまとめようと思ってだな・・・。」

「で、妖力のある僕を倒してその材料にしようとしたわけだ。」
「ああ……。」

「まあ、やりたいのならその鬼たちを倒してお前がなればいじやん。」

「……は？」

「だから、お前やりたいんだろ？ならやればいい。」

「だが、一番力の強い者が弱い者を導くのが当たり前だろ？お前の方が向いている。」

そう、俺に打ち勝った『猫又』の方が向いてるんだ。

「僕は……お断りだね。頼まれても。」

「な！？……。」

信じられない。なぜだ？普通は誰もがなりたいものじゃないのか？

「僕には向かないよ。……そんな役。」

「そうか……。よし！なら俺がやるしかねえ〜！！」

もう、いろいろと吹っ切れた。

戦真 side out

猫又 side

一言言える。なにこれ怖い。今の状況、戦真が「俺がやるしかねえ〜！！」山を登る 鬼たちのところに到着 俺がこの山の頭になる！ 鬼さん達がキれる 「なんじゃい、我！寝言は、寝てから言え！！」 戦真がキれる にらみ合いが始まる 今この状況

完全な一触即発の状況。

「待ちな！！」

「……？」「……」

「あんた見ない顔だね……。どこの誰かも分からん鬼にこの山を任せられるか！ここの鬼全員に勝ったら認めてやるよ！！」

女性の鬼がそう言い放った。

「いいだろう。それで、認めてもらえるならな！そのかわり！雑魚どもは、こっちの『猫又』が相手をする。そして、一番強い奴が俺とやる！どうだ！」

「チョイ待て！何で僕まで戦うことになってんだ！？」

「お前とて戦いたいだろう？妖怪ならな？」

「だから、言ったけど。僕は戦が好きじゃないの！分かった！」

「いいだろう。私がお前の相手だ。ほかは、そのひよろいのをやっちまいな！！！」

「……………おう！！姉さん！！」「……………」

怒ってもいいよね？

「くたばれや！！！」

そんな事言つて襲い掛かってくる鬼が一匹。

「くたばつてたまるか！」

「ウボア！」

ヤバイ。蹴つたら吹っ飛んだ。

「全員でかかれ！！鬼の勇猛さを見せる時だ！！！」

「……………うお……………！！！！！！」「……………」

「はあ……………」

そのため息を吐いて。高速で走りながら確実にけりを入れていく。

蹴りだからどんどん鬼が吹っ飛んでいく。よしあれ歌うぞ！

「ぶん、ぶん、ぶん。鬼が飛ぶ。」

「グヘ！」

「オブ！」

「猫の周りに鬼がくたかるよ。」

「グア！」

「チョブ！」

もうこの時点で鬼の数は残り一匹になってた。

「ぶん、ぶん、ぶん。鬼が飛ぶ！」

「ハガ！」

最後の鬼を蹴り飛ばした後、僕は

「エイドリアーン！」

と叫んで、腕・・・前足両方を空に向けて突き出した。

『猫又』 side out

「終わったみたいだね。こっちも始めようか。」

「ああ。」

「私は紅蓮花歌くればなな！この山の鬼を代表してあなたの決闘に受けて立つー！」

「俺の名は神気戦真！決闘を申し込むー！」

・・・夜の山・・・

「戦真見事な戦いだつたね。」

「てつ、見てたんかい！」

そんな会話をしながら鬼＋猫又一匹は宴会中である。ちなみに主人公はお水である。

「それにしても、あなたの名前は？鬼を一人で蹴散らす妖怪の名を聞いてみたいんだよ。」

「え？僕の名前？」

「こいつには、名はないらしい。」

「は？こんなに強いのに名前がない！ウソだろ？」

紅蓮は信じられないといった表情で主人公に尋ねる。

「僕の名前は・・・ウカノ・・・だ。」

「な！？お前名前無いつてー！」

「いや、ゴメン。前は嘘ついていた。（今適当に考えただけなんだけどね・・・。）」

「そうか、ウカノだね。私は紅蓮花歌て言うんだ。よろしく頼むよ。」

「よろしくね。僕の二人目の友達。」

「友達？」

「うん。だってここまで触れ合いを持ったら友達でしょ？」

「一人目は？」

戦真は気になって聞いてみた。

「もちろん、戦真・・・君だよ。」

「そうか。」

こうして、『猫又』改め『ウカノ』に二人の友達ができたのであった。

新たな能力と、天狗からの文（前書き）

どうも。霧夜です。昨日投稿し始めたばかりなのに、お気に入り登録五名、総合ユニーク数三百四名。このような小説を読んでいただきありがとうございます！これからも、受験に負けずに頑張っ投稿していこうと思うのでこれからもよろしくお願いします。

新たな能力と、天狗からの文

ウカノside

やあ、猫又改めウカノだよ。今日は僕から重大な発表があるんだ！実は、曲の記憶と歴史の記憶が戻ったんだよ！……うん。まあ、必死になって覚えた曲の歌詞とかが思い出せてよかったと思っってます。さて、こんなことを言っていますが……実は今、紅花さんの膝の上にいたりする。というか抱かれてる。

「……ねえ……紅花？何で僕は抱かれているのでしょうか？」「ん？そうだね。それはあんたが可愛いからじゃないかな？」

いや、なぜそこを疑問形で答える。くそ！疑問形に疑問形で返す新手の嫌がらせか？畜生！！

「……姉さん？次俺達にも抱かせてくださいよ？」「……」

「いや、お前たちもか！？というか、許可とるやつ間違えてね？それ普通僕に聞くよね！？」

「……いいだろう！あと、半刻後になー！！」

「……は、半刻後！！そりゃねーよ！姉さん！？」「……」

「いや！お前が答えるな！！しかも半刻後つてなげーな、おい！

！」

「グハ！」

とりあえず、紅花にドロップキックをお見舞いして抜け出した。

あれから、もう二十年はたつけど毎日がこんなだった。え？時間飛びすぎ？……気にしたら終わりだ。

そして、僕もこの二十年間何もしてなかったわけじゃない。ちゃんと修行してた。もう妖力も大変な量になったしね。あ、あと、僕

にはもう一つ能力が備わった。『式を操り、司る程度の能力』つまり、式を操ることもできれば、司ることもできるという何ともチート級の能力である。まあ、それで試しに式神を作ったわけだけど・・・正直に言って作りすぎたorz調子に乗って作ってたら百隊あまりの式神ができてしまった。ちなみに、妖怪を式にしたんじゃないよ？紙を使って作った式神だよ？僕の妖力を注ぎ込んであるのに姿は人間の少女である。違うところと言えば尻尾が二本と、頭にある猫の耳である。

「なあ？ウカノ？」

戦真が聞いてきた。

「なんだ？戦真？」

「この式神？というのかは・・・見ていていいものではないな。」
戦真の意見もごもつともだ。普段は札にしてあるが一度出すとすべて同じ姿をしている。また、心というものがない。元が一枚の札だからだろうか？でも、一体一体が高密度の妖力弾による弾幕を張れるのでこれを突破できる妖怪は、僕の知る中では戦真と紅花ぐらいだろう。式を司るためだろうか？最近計算に強くなったような気がする。元いた場所なら余裕で数学のテスト百点だっただろうな・・・。畜生！！

・・・三日後・・・

「ああ。平和だ。」

そんなことを呟いてみた。あれから三日たったがこの山は何も起きていない。要は、平和すぎて暇なのだ・・・いかん！妖怪にとつて暇は禁物と戦真と紅花が言っていた・・・気がする。

「・・・そうだ！久しぶりに人里を見に行ってみるか！」

人里とは、前に戦真が暴れていたあの里である。久しぶりと言っただけど実際、二十年もたってるんだよね。妖怪だと時間の感覚がお

かしくなるみたいだ。

「ウソだろ・・・おい。」

僕は自分の目を疑いたくなるような光景を見ている。なんとあの里がものすごく発展してる。前は、縄文時代くらいだったけど・・・今は、明治くらいになってる。・・・おかしくね？普通に考えてたかが二十年でここまで発展する文明は見たことも聞いたこともない。・・・いったいどうなってんの？まあ、いいや、戻ろう。

「おい。ウカノ大変だ！すぐに来てくれ！」

戦真が普段では考えられないほどに慌てて僕を呼びに来た。

「いったい何事？」

「詳しい話は後だ！とにかく来い！」

それで連れられてきたわけだが・・・みんな難しい顔してる。

「いったい何があったんだ？」

「・・・実はな・・・。天狗共からこんな文が届いた。」

紅花が表情を変えずに渡してきた。

「どれどれ・・・。」

- 鬼どもへ -

本日より七日後。そちらの山をもらいに行く。こちらは、白狼天狗から大天狗までの全兵力を引き連れて行く。その数は、貴様ら鬼を上回るだろう。降伏するのなら命まではとらん。早急に降伏せよ。

- 天魔 -

「つまりは、天狗が攻めてくるということか・・・。」

新たな能力と、天狗からの文（後書き）

次回は、天狗との戦いになると思います。誤字脱字などありましたら気軽に寄せください^^また、感想や、質問、コメントはできる限り返答できるようにしていきたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2275ba/>

東方癒式猫

2012年1月6日20時48分発行